新潟県に於ける明治の唄本（一）
― 書誌関係を中心に ―

板　垣　俊　一

はじめに

瞽女唄に興味を持って歌詞の整理を始めているうち、新潟県には明治から大正にかけて発行された〈唄本〉と呼ばれる小冊子が沢山あることを知った。半紙四つ折の横11.5cm×縦16.5cmほどの版型で、一冊わずか三丁か六丁（まれに四丁のものもある）、文句が長ければ上・中・下、あるいは第一号、第二号‥‥と分冊になっている。作品内容は後述するように様々であるが、表記はすべて平仮名を用い、仮名遣いに頓着せず、越後方言の発音のままに書かれている。定価は一冊あたり一銭五厘から三銭五厘程度。買い手の目をひくように、絵表紙に二、三色の彩色をほどこしてある。彩色の方法は簡単で、おそらく型紙を当てて部分々々に刷毛で絵の具を塗ったいわゆるカッパ版（注―桑山太市著『新潟県民俗芸能誌』1972、P.833）と思われる。出版者は長岡・柏崎・白根など各地に何人かいるが、刊記から推して、ほとんど個人で原稿を書き、版下を作り、版木を彫り、そして印刷出版した個人営業であったと思われる。しかも、当人一代限りの仕事であったようだ。

文句がすべて平仮名で、七音あるいは五音と句切りしてあることから、読む本ではなく、歌うことを前提にした出版物であり、総称としては〈唄本〉が相応しいと考えられる。ただし狭義には、書名に「何々くどき」とあるように、口説節で歌われたものが多いことから〈口説本〉とも呼ばれている。口説節は、幕末から明治にかけての流行り唄として全国的に大流行した歌謡であり、歌詞は江戸の書肆吉田屋小吉その他が小冊子として多数売り出している。また、少し遡って江戸時代中期の上方には兵庫口説があり、大坂を中心として出版された口説本が西日本一帯に広く流布し、盆踊りの音頭取りの台本となっていた。その他の地方においても、石川県金沢の唄本出版者近八郎衛門がいて、明治期に多くの〈唄本〉（口説本）を売り出している。越後の〈唄本〉もこうした出版物とかかわりを持っていると思われるが、その具体的な関係は良く調査する必要があるだろう。越後の唄本発行者たちの場合は、江戸・上方・金沢の出版書肆と異なり、素人の個人的な営業であった点において、地方芸能との関連を推測せしめ、瞽女の歌う〈口説〉の伝統もあることから、それとのかかわりも具体的に確かめる必要がある。

いたがき　しゅんいち
〒951 新潟市関屋堀割町1-2
瞽女唄四季の会（025-233-2098）

不充分な調査ながら、今まで私が知りえた範囲でも、明治十九年(1886)頃から大正七年(1918)頃までのおよそ三十年間に出版された越後の〈唄本〉の冊数は百冊を越える。これだけ顕著な文化的事象でありながら、一部の研究者を除いてあまり注目されて来なかったのは、資料が素人の個人が手軽に出版した粗雑な出版物に過ぎなかったことと、わずか三丁か六丁の小冊子であったため散逸して人目に付きにくかったことなどが原因であろう。以下、管見の資料をもとに、明治に発行された越後の唄本について考察したい。

明治27年丸山広蔵発行唄本
表紙絵『石童丸一代記』（著者架蔵）

一　現存資料の総覧と問題点

今後の調査によって、いずれ増補訂正が必要だろうが、現時点で知りえた〈唄本〉資料を、発行年順に一覧表として掲載してみた（本稿の末尾の表参照）。

表のNO.88からNO.92までの五冊は、刊記が切り取られていたり欠丁だったりして、発行者・刊年が不明なもの。ただし表紙は欠けているが柱刻がある場合には、「柱刻」として書名を掲げた。また、NO.93以下の十八冊は未見である。

表から分かるように、明治十九年から大正七年（NO.1～NO.87）まで、ほとんど毎年誰かが発行している。よって、空白になっている年、明治二十二年、明治二十八年、明治三十六年、明治三十九年から四十一年まで、そして大正二年にも何点かの発行があったはずで、今後見つかる可能性が充分にある。また、最も早いもので明治十九年だが、それ以前に遡る可能性も無いとは言えない。ただし、大正七年以降については、発行点数の漸減から考えて、そのあたりが下限ではなかろうか。

さらにまた、分冊になっている次の作品も全冊そろっていたと思われるから、欠号も当然見つかるはずである。

NO.15　『石山軍記』
NO.18　『かがみ山くどき』
NO.36　『すづきもんどう（鈴木主水）』

NO.37　『中将姫一代記』
NO.49　『鎌倉三代記貞女の鏡』
NO.53　『あさがほ日記』
NO.55　『後生くどき』
NO.58　『いざるかつ五郎よかよかぶし』
NO.64　『むめかわちよべい(梅川忠兵衛)』
NO.71　『川中島大合戦』
NO.72　『荒木又右衛門伊賀越の敵討』
NO.75　『葛葉子別』
NO.84　『ぜんごんくどくわさん(善根功徳和讃)』

(もし本号の読者に所在をご存知の方がいましたら是非教えて下さるようお願いします。)

毎年発行されている中で、発行点数の最も多い年は明治二十六年、八点十四冊で、同一人物(丸山広蔵)が九冊も発行しているのが目をひく。この表から判断される限りでは、明治二十五年から三十五年にかけてが唄本発行の最盛期と考えられる。ただし今後の資料の発掘によっては訂正が必要かも知れない。

毎年発行されていることは唄本の大きな特徴で、これは後で良く検討する必要のある問題である。

二　唄本の発行者

唄本一覧表の発行者を見るに、目立って発行冊数の多い人物が二人いる。丸山広蔵と地田多作で、それぞれ五十一冊、二十九冊と、他の発行者に比べて格段に多い。明治の唄本は主にこの二人の出版活動によって代表されると考えてよいが、彼らは決して出版業者でも本屋でもなかった。

刊記をもとに、一覧表に載る発行者の住所(戸籍)を次に掲げてみる。

丸山広蔵(51冊)　新潟県古志郡新町
(明治26年発行『佐倉惣五郎一代記』刊記)
地田多作(29冊)　新潟県刈羽郡柏崎
(明治30年発行『がいせんうた』刊記)
岡田信松(8冊)　新潟県中蒲原郡白根町
(明治25年発行『石山軍記』刊記)
栗山清七(4冊)　新潟県南蒲原郡三条町
(明治27年発行『景清ごくやみまい』刊記)
玉木寅蔵(3冊)　新潟県中蒲原郡茨曽根村
(明治31年発行『しまざきしんじょ』刊記)
中島嘉七(1冊)　新潟県三島郡与坂(ママ)上町
(明治19年発行『新板升つくし一ツとせぶし』刊記)
五十嵐清吉(1冊)新潟県中蒲原郡新津古町
(明治20年発行『新版お七吉三一代はなし』刊記)
＊桑山太市はこの他に次の発行人をあげている。
丸山音八　　加茂中町
常盤屋時造　　三条町
(「唄本の出版元」『高志路』206号、1965.)

丸山広蔵は長岡の人である。しかし今ではご子孫もいない。長岡市内に住む、孫に当たる人の奥さん(七十八歳)の話によれば、八年前に夫も亡くなり、縁者はいなくなったとのことである。また、新町の家は長岡空襲で、すべて焼き尽くされ、古いものは何も残っていないとのこと。ただし、彼女は昭和十九年に丸山家に嫁いだが、そのころ二階の一室には埃の被った版木が沢山保存されていたのを見たという。おそらく唄本の版木と思われる。夫の広吉氏は広蔵の孫に当たる人であった。奥さんはまた、夫の親の代に、「末広だんご」の名で団子を売る商売を始め、彼女もしばらく手伝った経験があるとの話だった。〈末広〉は、広蔵が唄本の発行元を「末広堂」(NO.38『石童丸一代記』表紙)と称したことから、それを継承したものと思われる。お墓は新町の広永寺。

まだ、ほのかに丸山広蔵を記憶している古老もおられるかも知れないが、私が知り得たのはこんなところであった。

二番目の柏崎の地田多作については、田村愛之助が次のように述べている。

柏崎のことを云うことになる訳だが、発行人地田多作、屋号を山谷屋と云うた。大正六年頃は相当の年齢で、それから二三年経てばもう亡くなつて居ることは確かで、前記大正六年に出た本が、恐らくは爺さんの最後の著作。

著作は大袈裟のようだが、実際歌の文句は元より、印刷も爺さん自身の手で出来上る。そればかりではない、刷り上つた本を手に持つて出て、柏崎停車場前に立つて歌う方までやつてのけるというので。

(田村愛之助「一ッ節の版元」『高志路』192号、1961.06)

これによって、唄本発行者の姿がかなり明白に知れる。彼らが、ほとんど一様に「著作兼印刷発行者」と刊記に記していることは、そのまま事実であった。勿論、内容や表紙絵のデザインは発行者の独創ではなく(下の『鈴木主水』の表紙絵を参照)、他に参考としたものがあった。しかし、単なる模刻・模作ではなく、本文も表紙絵もみずから版下を書いて発行したもので、よほど器用でなければできない仕事である。十数点の唄本に「版権所有」と記しているが、まさしくそう記す自負をもって発行していたものと思われる。しかも、注目されるのは、刷り上った本を手に持って、自分で駅頭に立つて歌う方までやってのけたという点である。唄本の性格が

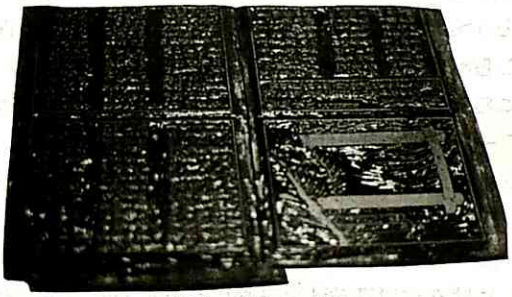
(左)江戸吉田屋版の表紙絵　　(右)岡田信松発行唄本表紙絵
(いずれも柏崎市立図書館蔵戯魚堂文庫本)

ここにあった。すなわち唄本は本屋の商品ではなく、歌いながら売る〈読売〉であったのである。刊記のあるものには、「おろしうり所」(岡田 NO.10、丸山 NO.19)「おろし小売所」(地田 NO.25、丸山 NO.47 NO.48 NO.50 NO.53)「大販売おろし」(丸山 NO.32)などとあるから、必ずしも自作自演の販売だけでなく、小売の立場で売り歩く者たちもあったのである。この点も後でまた詳しく述べたい。

ところで、発行者の話のついでに、唄本の版木を発見したので、それについて述べて置きたい。

大量に発行した丸山広蔵の版木は、空襲ですべて焼き尽くされたことは既述した。地田多作のものは柏崎市に現存するようだが未見である。たまたま白根へ調査に出かけた折、<しろね大凧と歴史の館>で「玉木寅蔵」と刊記にしるす、墨の付いた唄本の版木を見付けた。末尾の唄本一覧表に、玉木寅蔵としたもの三点は、実は発行されたものではなく、版木から確認した作品である。

この版木は一枚一作品で、裏表に二丁ずつ彫ってある。表紙絵が上下に半丁ずつ、柱刻は無い。前館長に依頼して発見された版木を使用して印刷を試みてもらったところ、表裏、半紙をそれぞれ四つに折って挿絵を表面にすると、製本せずに上下二冊が出来上がる簡便な仕立であることが分かった。下の写真は『かも川しんじゆ』という題の唄本である。至って粗雑な刷物ではあるが、これにも「二銭五厘」の定価が付いていて、読売り販売されたものであろう。



唄本の版木の一例
(白根市教育委員会所蔵)

版木からの印刷
(しろね大凧と歴史の館)

刷り上がり
(『かも川しんじゆ』)

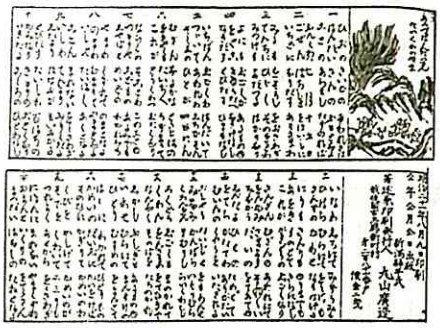
三　唄本の体裁と曲節

唄本のサイズは発行者にかかわらず半紙四分の一（横11.5cm×縦16.5cm）程度の縦長の綴じ本であるが、中には縦約15cm・横約40cmほどの横長二葉のものがまれにある。末尾の表、NO.1～6、NO.56～57、NO.66、NO.70、NO.74、NO.89等である。これらはなぜ横長の形式で発行されたのだろうか。発行年・表題・発行者を次に並べて見る。

NO	発行年	表　題	発行者	内　容
1	M.19	新板升つくし一ツとせぶし	中島嘉七	戯れ唄
2	M.19	しんばんお七吉三一代はなし	栗山清七	物語唄
3	M.20	しんばんお七吉三一代ばなし	五十嵐清吉	物語唄
4	M.20	小千谷町朝日橋てまりうた	地田多作	戯れ唄
5	M.21	佐倉惣五郎渡シ場	丸山広蔵	物語唄
6	M.21	あいづばんたいさんたいくわのやま	丸山広造	報道唄
56	M.31	刈羽郡上條村実子ころし	地田多作	報道唄
57	M.31	新ばんほうかへぶし	地田多作	戯れ唄
66	M.33	中頸き郡おかやむらしんじよう	地田多作	報道唄
70	M.34	刈羽郡小嶋村しんぢよ	地田多作	報道唄
74	M.35	中頭郡猪之山村実子ころし	地田多作	報道唄
89	?	佐倉惣五郎子わかれ（下）	?	物語唄
	?	世にめづらしきこどもしんじう	?	報道唄
	?	北魚沼郡堀之内しんぢょ	?	報道唄
	?	しんばんくまのこばなし	?	報道唄
	?	新版国民よそこいふし	?	戯れ唄

発行者に偏りはない。表題にしても傾向が特別顕著なわけでもない。ただ、あえて言えば、十六点中、物語によるものが四点(NO.2、3、5、89)だけで、会津磐梯山の噴火や心中・実子殺しなど、災害・社会的珍事の瓦版的報道が八点(NO.6、56、66、70、74…)も占めていることが目立つ。このことは、比較的発行年代の早い明治二十年前後に集中していることと合わせ考えると、時代的に先行する江戸の瓦版との関係を示しているものと思われる。

唄本が読売りされたものであったことはすでに述べた通りである。江戸時代、世間の珍事奇聞や災害の記事が粗悪な瓦版に刷られ、読売りされたことは周知のことである。しかし瓦版は、これといった体裁が決っていたわけではなかったが、管見の限り上記の唄本は次の写真に見るような形式に統一されている。本文も〈一ツトセ節〉の三行二十段で、数え歌風に構成され、明治の唄本の決った体裁であった。これは、新潟県以外でも同じようである（以下に掲げる明治二十五年岩手で発行された『きつねさき人殺一トセぶし』、或いは藤沢衛彦『流行歌百年史』所載の明治十八年に愛知で発行された『権八かぞえうた』参照)。成立の事情は分からないが、〈一ツトセ節〉が明治になって流行するに至った始まりは、『勧学一つとや節』（明治六・七年頃流行)のような児童のための教化数え歌だったという（藤沢衛彦『流行歌百年史』1951.)。この〈一ツトセ節〉の流行を俗謡において担った明治の読売たちが、横長二枚からなる瓦版風の体裁の唄本を、全国的に普及



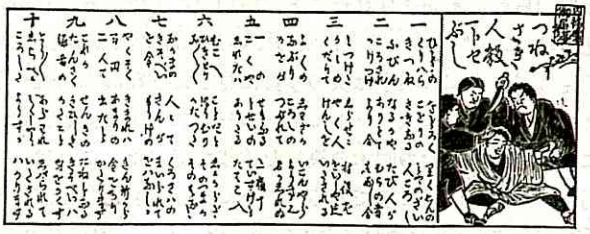
明治26年丸山広造発行『あいづばんたいさんたいくわのやま』（柏崎市立図書館、田村愛之助旧蔵本）

せしめたものと考えられる。

横長二枚の唄本は、〈一ツトセ節〉という流行り節と一体のものとして生まれたと考えられるが、〈一ツトセ節〉の唄本がすべてこの体裁となっているのではない。半紙四分の一の綴じ本もある。時代の流れとしては“一冊三丁”からなる綴じ本に移行していっていると見てよい。明治三十年代に地田多作が横長の唄本（NO.56、57、66、70、74）を出しているが、これは旧体裁に変えることで却って新鮮な印象を与えようとした商売上の作戦だろう。ともあれ、〈一ツトセ節〉の唄本は、一冊三丁からなり、文句の構成にも次のような定型があった。

(a) 文句を七五調に整える
(b) 一行の文句を三・四・五音に分ける
(c) 一段三行からなる
(d) 全部で二十段からなる
(e) その他、数え歌としての性格
（次に引用する作品では、各段の出だし文句が、「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と」「い、に、さ、し、こ、ろ、し、は、く、に」の音で始まる。）

このような字配りの定型は、〈一ツトセ節〉という同一の節廻しで歌うことを前提とする限り、横長二葉のものと同じである。これは全国的な定型であり、他県で発行されたものでも同様であったと思われる。次に岩手県で発行された作品の具体例を掲げよう。



『きつねさき人殺一トセぶし』

一　ひとの　をとろく　りくせんの
　　くりはら　こをりの　みやのざい
　　きつね　さきなる　人ころし
二　ふびん　なるかや　たび人が
　　ころされ　ありとて　むらの者
　　かけつけ　より合　はなし合
三　みつけた　しらせた　村役ば
　　かみの　やく人　をいしや迄
　　くだりて　けんしを　いたされる
四　よくの　しわざか　いこんやら
　　なぶり　ころしの　ようす也
　　かをが　つぶれて　名がしれぬ
五　一の　せきなる　上横丁
　　こくや　とせいの　ていすけと
　　しれたは　ありたる　たはこ入
六　むこへ　ことだと　しにからだ
　　ひきとり　ほうむり　そのつまか
　　なく〳〵　かたつた　そのはなし
七　なかまの　人にて　くろさはの
　　きそべい　さんが　まいられて
　　を金　もうけの　をはなしに
八　やくそく　きまれは　きん所から
　　百円　あまりの　金をかり
　　二人て　出たと　かたります
九　これか　せんきの　たねとなる
　　たんさく　きひしき　きそべいは
　　縁者の　かたにと　身をかくす
十　とう〳〵　あらわれ　しばられて
　　しらべに　はくしやう　いたされる
　　ころした　ようすか　はかります
————以下、二枚目————
十一　いつわり　さそいし　ていすけを
　　かんなり　さはべに　みやのから
　　たまして　つれこむ　きつねさき
十二　にげる　よもまも　あらばこそ
　　こゝに　まちいる　友だちと
　　きるやら　つくやら　なぐるやら
十三　さんざ　むざん　なぶりきり
　　ゆびも　てあしも　づた〳〵に
　　みゝも　目はなも　打つぶし
十四　しんだ　ようすに　ふところの
　　百円　あまりの　金をとり
　　あとを　くらまし　ぬけました
十五　こうあく　を神か　ゆるさなく
　　からだ　壱つの　をきどころ
　　天地の　あいだか　せまくなる
十六　ろくに　心も　をちつかず
　　うか〳〵　しるべを　たよりいて
　　たんさく　とゝいて　このしまつ
十七　しれるは　ひつじやう　きまりもの
　　いまは　つゝまず　申上
　　を上の　こほうを　まつばかり
十八　はなしを　きへても　をそろしや
　　きん所　となりは　大さか(わ)き

みた人　みの毛も　よたつだろ
十九　くには　ひらけて　こく道や
けん道　むらみち　ひろけれと
あくの　行 み ち　さらになへ
二十　人けん　一 生 の　そのうちに
ぜんと　あくとの　たてわけは
ひのてる　みかけに　わりけ(ママ)ます

明治廿五年二月三日印刷
仝　年仝月仝日出版
岩手縣西磐井郡一関町字新大町
七百五十壱番戸寄留平民
著作印刷兼発行者　佐野徳之助
定價二戔

冊子体の唄本は原則として一冊が三丁または六丁からなっている。その丁数の差は、このように曲節の差であることが知れる。三丁からなる作品は〈一ツトセ節〉であったが、では六丁からなる作品はどうか。

六丁からなる作品の多くは、題名に『鈴木主水白糸くどき』あるいは『おくめさでんじくどきぶし』など、「くどき」「くどきぶし」と称するものが多い。末尾の一覧表からはこれを二十一例拾うことができる。幕末から明治にかけて流行した代表的な〈口説節〉は、〈越後口説〉とも言われた「○○○サアエー」(○○○は出だしの文句)で始まり「ヤンレイ」で歌い納める〈やんれ節〉(やんれ口説節)であった。文句は7・7調で、「くどき」と称する唄本の字配りでは、3・4・7調となっている。ただし、題名に「くどき」と無くとも、文句が3・4・7音となっている作品が末尾一覧表の半数近くを占めている。また、NO.27岡田信松発行『小栗判官二度対面実録』(M.26)、NO.29岡田信松発行『八百屋をしち実録咄』(M.26)、NO.46丸山広蔵発行『宮本左門誉物語』(M.29)などは、字配りが3・4／4・3となっているものもある。これらをもすべて〈やんれ口説節〉の唄本とすべきかどうか定めがたいのだが、少なくとも7・7調であることから〈やんれ口説節〉で歌うことが可能な文句ではあるだろう。とりわけ3・4／4・3とあるものは〈やんれ口説節〉にいっそう良く対応する字配りである。なぜなら、菅女の伝える〈やんれ口説節〉に、それを確認することができるからである。7・7調の文句で歌う高田菅女の口説も、長岡菅女の口説も、細かく聴くと3・4／4・3で繰り返されている。(磯貝みほ子「金沢の口説・近八版・その特徴(二)」『群女国文』1993.03でも、これが口説のリズムであったことを説く。) 題名に「くどき」と付けない作品には二～四冊と続くものが多いから、何か曲節上の差があったものとも考えられるが、それらも〈やんれ口説節〉で歌うことが可能な作品ではあったと言えるだろう。

三田村鳶魚は、「読売の枚数は上下四枚が通例だが、弘化の伊予節は三枚づゝ六枚のがあり、安政のヤンレイくどきは六枚のが多い。チョンガレには八枚のが出来、阿房陀羅経は十二枚になった」(『瓦版はやり唄』P.4)と述べている。明治の唄本は、このような幕末の頃の六丁構成をもとにしているのではないか。ただし、新潟県の唄本よりも時代的に先行する金沢の近八書房刊行の〈やんれぶし〉唄本は、この例とは異なる。

おわりに

以上、現時点で知りえた資料をもとに、新潟県の明治期に発行された唄本について、問題の一端を述べた。紙面の制約もあることゆえ、今回は主に書誌的な問題を中心に考察したが、本来唄本としての性格から考えれば、その芸能的な諸問題についても当然考察する必要があろうし、また文句の内容面では幕末の江戸で発行された口説本との関係や金沢の近八書房刊行の〈やんれぶし〉との関係も考察する必要がある。さらには菅女唄との関係も日程に上ってくるだろう。いずれ別稿を用意したいと考えている。

《参考》　越後の唄本に関するこれまでの論文・資料に次のようなものがある。
田村愛之助「一ツ節の版元」(『高志路』192号、1961)
桑山太市「唄本の出版元」(『高志路』206号、1965)
網干嘉一郎「じらいや・ものがたり口説の歌本の紹介」(『高志路』211号、1967)
鈴木昭英「菅女の歌本」(『長岡郷土史』11、1972)
柏崎市立田尻公民館編『田尻のほりおこし』第二号(1982)

附記　黒埼町木場の丸山和五郎さんから、多数貴重な唄本のご提供をいただきました。また、資料の探索にあたり、新潟県立図書館の鶴巻武則さん、柏崎市立図書館資料係長関矢さんにお世話になりました。記して感謝申し上げます。
(1997.08)

【新潟県明治期発行の唄本一覧】

NO.	発行年	書　名	発行者	所　蔵	備　考
1	M.19.01.07	新板升つくし一ツとせぶし	中島嘉七	戯魚堂文庫	横長版
2	M.19.04.13	しんばんお七吉三一代はなし	栗山清七	戯魚堂文庫	横長版
3	M.20.03.21	しんばんお七吉三一代ばなし	五十嵐清吉	越中書林	横長版
4	M.20.?.20	小千谷町朝日橋てまりうた	地田多作	福地書店	横長版
5	M.21.04.01	佐倉惣五郎渡シ場	丸山広蔵	田村愛之助	横長版
6	M.21.08.09	あいづばんたいさんたいくわのやま	丸山広造	田村愛之助	横長版
	M.22..	?			
7	M.23.03.17	一のたにたまおりくどき	丸山広蔵	田村愛之助	
8	M.23.03.26	忠臣蔵　(柱刻)	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
9	M.23.03.28	ごしょうくどき	丸山広蔵	丸山和五郎	黒埼常民文化史料館所蔵
10	M.23.04.01	鈴木主水白糸くどき	岡田信松	戯魚堂文庫	
11	M.23.12.19	おくめさでんじくどきぶし	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
12	M.24.02.27	お七吉三くどき	地田多作	戯魚堂文庫	
13	M.24.03.?	いざるかつごろくどき	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
14	M.24.04.09	あわなるとじゆんれくどき	地田多作	著者架蔵	
15	M.25..	石山軍記（上二）	岡田信松	丸山和五郎	
16	M.25.01.11	はつはるのごまんざい	丸山広蔵	著者架蔵	
17	M.25.01.14	石山軍記（上）	岡田信松	丸山和五郎	
18	M.25.03.10	かがみ山くどき(上の一)	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
19	M.25.11.22	なべしまねこさうどう（下）	丸山広蔵	丸山和五郎	
20	M.25.12.24	千代萩（上）　(柱刻)	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
21	M.25.12.24	千代萩（下）　(柱刻)	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
22	M.26.02.04	佐倉惣五郎一代記（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
23	M.26.03.18	岩見重太郎一代記（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
24	M.26.04.02	角力火消大喧嘩	丸山広蔵	丸山和五郎	黒埼常民文化史料館所蔵
25	M.26.04.09	おふではんさしんじよ（上）	地田多作	田村愛之助	
26	M.26.04.14	おふではんさしんじよ（下）	地田多作	田村愛之助	
27	M.26.11.01	小栗判官二度対面実録（一）	岡田信松	丸山和五郎	
28	M.26.11.01	小栗判官二度対面実録（二）	岡田信松	丸山和五郎	
29	M.26.11.17	八百屋をしち実録咄	岡田信松	戯魚堂文庫	
30	M.26.11.25	佐倉惣五郎一代記（中）	丸山広蔵	丸山和五郎	
31	M.26.12.	石井常右衛門吉原遊び	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
32	M.26.12.03	平井権八東下り（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
33	M.26.12.13	石井常右衛門一代記（上）	丸山広蔵	田村愛之助	
34	M.26.12.13	佐倉惣五郎一代記（下）	丸山広蔵	丸山和五郎	
35	M.26.12.24	平井権八編笠除	丸山広蔵	田村愛之助	
36	M.27.01.31	すづきもんどう（上）	地田多作	田村愛之助	
37	M.27.02.22	中将姫一代記（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
38	M.27.02.23	石童丸一代記	丸山広蔵	著者架蔵	
39	M.27.07.17	かげきよごくやみまい（一）	栗山清七	丸山和五郎	
40	M.27.07.17	かげきよごくやみまい（二）	栗山清七	丸山和五郎	
41	M.27.08.01	かげきよごくやみまい（三）	栗山清七	丸山和五郎	
42	M.27.10.06	小栗判官二度対面実録（四）	岡田信松	丸山和五郎	
43	M.27.12.26	平井権八辻切	丸山広蔵	田村愛之助	
	M.28..	?			
44	M.29.01.27	岩見重太郎一代記（二）	丸山広蔵	丸山和五郎	
45	M.29.02.13	をつる（柱刻）	岡田信松	長岡市立博	
46	?	宮本左門誉物語（第一）	丸山広蔵		
47	M.29.11.22	宮本左門誉物語（第二）	丸山広蔵	田村愛之助	
48	M.29.11.29	宮本左門誉物語（第三）	丸山広蔵	田村愛之助	
49	M.29.12.06	鎌倉三代記貞女の鏡(上)	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
50	M.29.12.06	宮本左門誉物語（第四）	丸山広蔵	田村愛之助	
51	M.30.02.15	がいせんうた	地田多作	田村愛之助	

NO.	発行年	書　名	発行者	所　蔵	備　考
52	M.30.02.21	岩見重太郎一代記（三）	丸山広蔵	田村愛之助	
53	M.30.11.13	あさがほ日記（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
54	M.30.11.18	岩見重太郎一代記（四）	丸山広蔵	丸山和五郎	
55	M.30.11.21	後生くどき（下）	丸山広蔵	丸山和五郎	
56	M.31.02.03	刈羽郡上條村実子ころし	地田多作	田村愛之助	横長版
57	M.31.02.09	新ばんほうかへぶし	地田多作	田村愛之助	横長版
58	M.31.02.23	いざるかつ五郎よかよかぶし（上）	地田多作	戯魚堂文庫	
59	M.31.11.24	しまざきしんじょ	玉木寅蔵	著者架蔵	白根大凧と歴史の館
60	M.31.11.27	あかしごぜんむまかたさごへい	地田多作		鈴木昭英「刈羽巫女」
61	M.32.01.27	小栗判官二度たいめん	地田多作	戯魚堂文庫	
62	M.32.06.12	かも川しんじゅ	玉木寅蔵	著者架蔵	白根大凧と歴史の館
63	M.32.06.13	信徳丸一ッぶし	地田多作	田村愛之助	
64	M.32.10.14	むめかわちよべい（一）	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
65	M.32.12.17	いちごめぐり	丸山広蔵	丸山和五郎	黒埼常民文化史料館所蔵
66	M.33.04.09	中頸き郡おかやむらしんじよう	地田多作	田村愛之助	横長版
67	M.33.11.15	成田利生記誉の横綱（下）	丸山広蔵	丸山和五郎	
68	M.34.02.03	奥州白石噺志賀段七敵討（上）	地田多作	田村愛之助	
69	M.34.02.24	奥州白石噺志賀段七敵討（下）	地田多作	戯魚堂文庫	コピー判
70	M.34.03.18	刈羽郡小嶋村しんぢよ	地田多作	田村愛之助	横長版
71	M.34.11.02	川中島大合戦（上）	丸山広蔵	丸山和五郎	
72	M.34.11.21	荒木又右衛門伊賀越の敵討(下)	丸山広蔵	丸山和五郎	黒埼常民文化史料館所蔵
73	M.35.01.30	すいのなみだ	玉木寅蔵	著者架蔵	白根大凧と歴史の館
74	M.35.04.13	中頭郡猪之山村実子ころし	地田多作	田村愛之助	横長版
75	M.35.12.12	葛葉子別（中）	丸山広蔵	著者架蔵	
	M.36..	?			
76	M.37.01.13	左甚五郎（上）　（柱刻）	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
77	M.37.01.13	左甚五郎（下）　（柱刻）	丸山広蔵	田村愛之助	表紙欠
78	M.38.05.05	新ばん大流行さのさふし	地田多作	田村愛之助	
79	M.38.11.17	大はやりらつばぶし	丸山広蔵	著者架蔵	
	M.39..	?			
	M.40..	?			
	M.41..	?			
	M.42..	（NO.92 西国三十三所御詠歌）			
	M.43..	（NO.93 京都鴨川真男しんぢよ）			
80	M.44.04.09	新版善光寺しにんこうりつめ	丸山広蔵	著者架蔵	
81	M.44.08.19	群馬県吾妻郡中之條町爆裂弾情死一ッふしラッパブシ入	地田多作	著者架蔵	
82	M.45.02.11	長野県塩尻遊廓情死一ッぶし	地田多作	著者架蔵	
83	M.45.03.04	長野県豊野駅木嶋屋ニテ芸妓番頭硫酸の情死一ッふし	地田多作	著者架蔵	
	T.02..	?			
84	T.03.02.25	ぜんごんくどくわさん（下）	丸山広蔵	戯魚堂文庫	
	T.04..	?			
85	T.05.10.03	新潟県刈羽郡刈羽村一家五人みなごろし及び放火一ッぶし	地田多作	田村愛之助	
86	T.06.03.02	新潟県刈羽郡刈羽村一家五人みなごろし一ッぶし（下）	地田多作	田村愛之助	
87	T.07.12.16	長野県諏訪郡上諏訪遊廓内毒薬しんぢょ一つぶし	地田多作	戯魚堂文庫	
88		平和さのさふし(柱刻)		田村愛之助	表紙欠
89		佐倉惣五郎子わかれ（下）		田村愛之助	横長版　刊記なし
90		佐倉惣五郎子わかれ（上）		田村愛之助	刊記切断

NO.	発行年	書　名	発行者	所　蔵	備　考
91		佐倉惣五郎子わかれ（下）		田村愛之助	刊記切断
92		石堂丸かるかや一代くどき		戯魚堂文庫	2丁で欠
93	M.24.01.24	しんらんしやうにんごなんぎくどき	丸山広蔵		『田尻のほりおこし』2号
94	M.30.02.	すずきもんどう	地田多作		『田尻のほりおこし』2号
95	M.30.02.04	やまなかしかのすけ	地田多作		『田尻のほりおこし』2号
96	M.35.11.25	しんとく丸なんぎ牡たん	丸山広蔵		『田尻のほりおこし』2号
97	M.42.06.12	西国三十三所御詠歌	地田多作		『田尻のほりおこし』2号
98	M.43.02.	京都鴨川真男しんぢよ	地田多作		『田尻のほりおこし』2号
99		中将姫雪貢くどき			『田尻のほりおこし』2号
100		浦里時次郎くどき			『田尻のほりおこし』2号
101		番町皿屋敷お菊怪談			『田尻のほりおこし』2号
102		鬼神お松一代くどき			『田尻のほりおこし』2号
103		国定忠次侠客くどき			『田尻のほりおこし』2号
104		先代萩政岡忠義くどき			『田尻のほりおこし』2号
105		廿四孝八重垣くどき			『田尻のほりおこし』2号
106		お染久松くどき			『田尻のほりおこし』2号
107		お筆くどき			『田尻のほりおこし』2号
108		越後の大騒動黒鳥兵衛征伐			『田尻のほりおこし』2号
109		上原しんぢよくどきぶし			鈴木昭英「刈羽菅女」
110		長崎情死おちや貞さくどき			鈴木昭英「刈羽菅女」
111	M.32.10.10	自来也（一）	丸山広蔵		網干嘉一郎（高志路 NO.211）
112		児雷屋（二）	丸山広蔵		網干嘉一郎（同上）
113	M.33.11.15	じらいやものがたり（三）	丸山広蔵		網干嘉一郎（同上）
114		自来也物語（四）	丸山広蔵		網干嘉一郎（同上）

（所蔵者）
＊戯魚堂文庫 …柏崎市立図書館、桑山太市旧蔵本
＊丸山和五郎 …黒埼町木場の丸山和五郎さん所蔵本
＊田村愛之助 …柏崎市立図書館所蔵田村愛之助旧蔵本
＊著者架蔵　 …著者板垣所蔵本
※その他、間接的に作品名を知りえたものに次のような作品がある。
『世にめづらしきこどもしんじう』（横長版）
『北魚沼郡堀之内しんぢょ』（横長版）
『しんばんくまのこばなし』（横長版）
『新版国民よそこいふし』（横長版）
『酒呑童子頼光山入』
『八百屋おしち一ツトセふし』
（『福地書店和本書画目録』平成五年十二月号掲載）